

Title	The Conquest of the North Pole, by J. Gordon Hayes, 1934, London
Sub Title	
Author	犬塚, 久雄(Inuzuka, Hisao)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.1 (1936. 5) ,p.163- 167
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Conquest of the North Pole, by

J. Gordon Hayes, 1934, London.

「最近北極地方探検史」とも言ふべき本書は、英國に於ける極地地理學の權威ヂェー・ジー・ヘイス氏に依つて公にせられたものであるが、同氏の既著「Robert Edwin Peary, "Antarctica," "The Conquest of the South Pole"」等と共に兩極地方の研究を志す者の見逃がし得ざるものである。

本書は西紀一九〇九年より一九三四年に至る二十五年間に於ける、主要探検隊の行動に就き詳細なる解説を行ひたるものにて、所謂、最近北極地方探検史の名稱を附する所以である。

一九〇九年四月六日、米人ピーリーに依り遂ひに北極點到達の事業完成さるゝに及んで、茲に北極地方探検界に一轉機を見るに至つたのである。即ち、從來の寧ろ冒險を主とする探検旅行に代り、北極圏内全般に互り、諸種の科學的研究の進歩を見る事になつたのである。爾來、今日に至るまで、英・米・獨・露・瑞・丁等諸國の各地方に派遣せる各種學術調査隊の數は極めて多く、従つてその調査研究に關する報告書類の如きも、關係諸國政府により或ひは探検隊自らの手に依り、世界に發表せられて居るが、それ等の中にて、特に主要なるものを要約し、且つ年次順に配列し、しかも著者自身の權威ある學識は之等の検討を行つて餘す所なく、されば最近北極地方調査探検の情況を知らんとする者には、既に記したる如く最も良き參考書となり得るものである。

書評

尙ほ、卷頭に、「本書をジー・ワトキンスに捧ぐ」とあるは、一九三二年英政府の派遣せる北極地方航空路開拓探検隊の隊長として、僅か二十五歳の青年探検家ジョージ・ワトキンスが、東グリーンランド海岸地方に於ける熱心なる學術調査を遂行中、遂ひに同地に於いて探検の尊き犠牲となりたるに對して、著者が、その靈に敬意を表したるものであらう。事實、本書の中にてワトキンスの探検隊に關する記事は最も詳細を極めて居るのである。

扱て、本書は前後二十章に分けられて居るが、此處にその内容を簡単に記せば、「第一章」所謂北極地方の地理學的概説、「第二章」ピーリー以前に於ける北極到達への諸探検隊の活動、並びにピーリー自身の成功に關する經過、「第三章」一九〇六—八年に於けるデスマーク探検隊の指導者ミリュース・エリックセンが北東グリーンランドに行ひたる探検、「第四章」前章のエリックセンが北東グリーンランドの地に探検の犠牲となりたる後を繼いで、同じデンマーク探検家キャブテン・ミッケルセンが一九〇九—一一年に互りて行ひたる北東グリーンランド地方に於ける探検、「第五章」第十九世紀末に於けるナンセン、ピーリー、近くはラスムッセン、ジェー・ビー・コッホ、ド・ケルヴェン、ウエゲナー、メーレン、スコット、ワトキンス、ライミル等のグリーンランド氷高原横斷に關する經過の詳細なる解説、「第六章」エーラシヤ大陸側に於ける北極海方面に關するロシア探検隊の活動、特に一九三〇年以後に於ける多くの碎氷船の行動情況、「第七章」一九一〇—一四年に於ける、ロシア探検家ウィルキツキのなせるシベリヤ側に於ける北東通路の開拓、並びに、彼のセーウエルナヤ・ゼムリヤ島發見の經過、

(六三)

一六三

及び一九一七年以後數年間に亙る大探検家アムンゼンのシベリヤ沿岸になせる探検、最後に、一九三二年ソヴィエト政府に依りて行はれたる、隊長シユミット教授引率の碎氷船シビリヤコフ號の、歐露より極東に至る、探検史上空前とも言ふべき、一夏一航海による北東通路征破に關する解説、「第八章」デンマーク人を兩親に持ち、而も自らはグリーンランドの地に生れたるラスムツセンが遂ひにグリーンランド探検に一生を捧げたる事情を、數回に亙る探検旅行の説明に依りて明らかにし、「第九章」北米大陸側北極海群島方面に於ける學術探検に關し、一は一九〇八年以後數年間カナダ政府命令の下に活動せるメルニエ、他は一九一四年以後數年間アメリカ政府命令の下に活動せるマックミランの詳細なる調査報告の検討、「第十章」カナダ政府後援の下に一九一〇—二〇年の間に數回行はれたる、ステファンソンを隊長とするカナダ北極海沿岸特にマッケンジー河附近の探検、「第十一章」一九一三年、カナダ政府により派遣せられたる、隊長バートレット指揮の探検隊はカルヌック號にて北極海群島より北西通路に従ひてペーリング海方面に向ひたるも、堅氷のため遂ひにシベリヤ北東海上に在るウランゲル島附近に冬營を行ひたるも、劇しき氷壓のため船は沈没の厄に遭ひ、非常なる苦難の結果、二年にして無事に救出せられ、而もその間、一行の氷上に於ける各種學術研究に對する態度は極めて熱心なるものありし點を詳細なる記録に依りて説述し、「第十二章」デンマークのグリーンランド探検家として著名なるジェー・ピー・コッホの甥、エル・コッホ博士も亦熱心なるグリーンランド探検家であり、一九一三年以來現在に至るまで、前後七回の同

島探検を行つてゐる。本章にては、一九三一—三四年の間に行はれたる第四回東グリーンランド地質調査に關する經過である、「第十三章」デンマーク人、キャプテンピストルップを隊長とする東グリーンランド調査隊は、テディー號にて一九二二年六月より探検を開始したるも、堅氷のため間もなく同號は破壊されたのであるが、その間の一行の苦心の情況を詳述せるもの、「第十四章」第二十世紀に入つて、一九二一年以前に於けるイギリスは、餘り北極探検に關係しなかつたのであるが、一九二一年に至り、オックスフォード大學探検隊の組織せらるゝに及んで、北極地方に對する關心は國家的となつたのである。同大學にては、最初は特にスピッツベルゲン諸島方面に調査隊を派遣したるため、ケンブリッジ大學のグリーンランドに於けると好對照をなし、現在も主として同諸島方面に研究の中心を置いてゐるのである。現在、オックスフォード大學探検隊の中心人物は嘗て一九二一年第一回探検隊のスピッツベルゲン行きに一學生として参加し、その後、毎回参加し、遂ひに名を成したるピンネイである。彼は、勿論、現在イギリスに於ける極地探検家として重要な位置を占めて居る。「第十五章」ウォルデーを中心とするケンブリッジ大學の北極探検に關する章である。前章にて記述せる如く、オックスフォードのスピッツベルゲンに對してケンブリッジのグリーンランドである。ウォルデーは嘗て、一九一四—一六年に於ける彼の有名なるシャックルトン南極探検隊に一地質學者として参加し、その後、スピッツベルゲン諸島にも探検旅行を行ひたる經驗家である。一九二三年以後は全力をグリーンランド探検に注ぎ、現在も同島地質調査

には「權威として活動を續けてゐるのである。」「第十六章」ジ・アルガイソン、エフ・エド・ウォーズレー兩人を主腦とする、イギリス スピッツベルゲン探検隊に依り一九二四—二五年に於いて、北部及東部スピッツベルゲンに行はれたる學術調査に關する記述並びに、一般のスピッツベルゲン探検史に就きて略説し、最後に、最近の同諸島が英、米、獨、諸その他諸國に依り毎夏觀光團の旅行地となりたる程一般化する現状、及び將來に於ける産業的價値の問題に對する著者の地理學上よりする卓見を窺ふことが出来る。

「第十七章」一九一六年ロシア人ナグルスキーがファルマン式水上飛行機にてノヴァヤゼムリヤ島附近を飛行してセドフ探検隊の救援を行ひたること、北極地方飛行の最初であること、その後、に於けるアムンゼン、ミッテルハルツェル等の功績、更に、一九二六年、最初の北極海大横斷を執行せるアムンゼン、ノビレのノルグ號、アル・イー・バード、ウィルキンス等に關する詳細なる記述、更に今日の極地探検上、航空機の有する價値に言及し、今日も尙ほ新島の完全なる調査を行ふに當りて最も重要な機關は足と手とであるが、然しながら探検家の眼の役割を演ずる航空機は之れ亦重要缺くべからざることを論じて居る。

「第十八章」時を異にしては居るが、航空機による北極探検の悲劇を二つ取り扱つて居る。

一九二六年、アムンゼンと共にノルグ號にて北極横斷を完成したる、イタリヤ人ノビレは、再び航空機に依る北極地方學術探検を計畫し、ムツソリニ後援の下に、ノルグ號姉妹飛行船イタリヤ號にて、一九二八年五月スピッツベルゲンのキングスハーバー

より一行十五人にて出發したるも、途中暴風のため氷原上の大水塊に衝突、六人の慘死者を出し、救助信號を受けたるロシア砕氷船クラッソン號及びマリイギン號の目撃しき救援作業となり、他の生存者一同無事に救出せられたる事は有名な話であるが、その際に、友の救助に向ひたるアムンゼンが遂ひに北極海上にて遭難し、非命の最後を遂げたることありしことを忘れてはならぬ。

更に、一八九七—一八九八年の間に起りたる悲慘事にて、一九三〇年に至るまで、最後の事情を世人に知られずして經過したるアンドレー探検隊の詳報が記されて居る。輕氣球による探検を計畫したる、スウーデン人アンドレーは、一八九六年第一回北極探検を計畫して成らず、翌年再度決行し、同志ストリンドマルグ、フレンケルの二青年を伴ひ、七月十一日スピッツベルゲンを出發したのであるが、以後、全く消息を絶つたのである。

一九三〇年、ノールウエー海豹船ブラトヴァーグ號乗組員が、スピッツベルゲン東方のホワイト島に上陸、はからずも一キヤンプの殘存物によりて、アンドレー探検隊の遭難地點を三十三年目に發見し得たのである。發見されたる探検隊の日記によれば、一八九八年一月一七日を最後の記録となす點より、一年三ヶ月間氷上に苦難の旅行を續けて、遂ひに世に救はれなかつたのであるが、此のアンドレー一行の極地探検こそ、世界に於ける航空機使用の最初のものなりしことは注意すべき事である。「第十九章」大陸漂移説にて著名なるドイツの物理學者アルフレッド・ウエゲナー博士は、又、極地探検に於いても功績多く、しかも遂ひにグリ

グリーンランド探検中に、同地に於いて研究の尊き犠牲となりたるものである。本章は、その最後の探検を行ひたる一九三〇年の學術調査に關する詳報を主として居る。一九三〇年五月四日、グリーンランド西海岸グスタフホルムのカマルヂユックに到着し、それより結核の準備を整へ、内陸氷嶺まで百二十日を要し、東海岸のカンゲルドラクサクク氷河地點に冬營所を設置したるは十月のことである。探検隊豫定中の最も重要な高麗原屯所の建設は七

月中旬に着手したのであるが、その地點は東西兩海岸よりの中心點にして、カマルヂユックの東方二四〇哩の所、九七〇〇呎の高所である。此のグリーンランド中央屯所には、一行中のゲオルギ、ソルジイの兩名が留まつたのであるが、その後、石油その他の物資の缺乏を告げたるため、ウエゲナーはカマルヂユックより救援のため、ローウエ及びエスキモー人ラスムス・ウィルムセンを伴ひ出發したのである。途中、ローウエの凍傷に苦しみたるため、之れをゲオルギ、ソルジイ等と共に中央屯所に留め、エスキモー人及びウエゲナーの兩人のみカマルヂユックに向つて戻ることをなつたのである。出發日は一九三〇年十一月一日にて、而も隊長ウエゲナーの第五〇回誕生日であつた。一方、カマルヂユックに於ける殘留隊は隊長等の歸還を待ち兼ね、遂に搜索隊を組織し、一九三一年四月末、西海岸を出發して東行し、途中、エスキモー人ラスムスに依りて町重に埋葬せられたる隊長の死體を發見するに至つたのである。ウエゲナーは凍死せるものではなく、疲勞の極、テント内にて死亡せるものである。されども、ラスムスの行方は今日に至るも遂に知らぬままである。而して、その後に

於ける一行は、勇敢にも探検を續行し、殊に、反響装置に依る内陸氷の厚度測定の様子は最も重要なものである。探検隊は一九三一年一月無事にコーペンハーゲンに到着した。「第二十章」既に記したる如く、著者が最も敬意を表して居るワトキンスは僅かに二十五歳にして北極地方探検の犠牲となつたのであるが、その最後に關しては、十年前に於ける南極のシャックルトンの場合同様、英國民の間に相當の衝動を與へたのである。

一九二五年、ケンブリッジのトリニティー・カレッジに入りたる十八歳の當時より、彼ワトキンスは極地探検に注意を始め、二十歳にして、遂に自ら海豹船を準備し、スピッツベルゲンに行つたのであるが、之れは彼の最初の極地行であつたのである。

一九二八―二九年に互り、ラブラドルに赴き、内部の未踏地帯の調査を計畫せしこともある。

イギリス北極航空路開設探検隊一九三〇年王立地理協會後援のもとに、各方面の學者多數の参加に依りて決行されることになり、總員十四名中、十名まではケンブリッジ關係であつた。

一九三〇年七月六日、クレスト號はテムズ河を出帆し、七月末グリーンランド東南海岸のセルミリック峽灣に到着し、それより各班に分れ、夫々、根據地を設け、各種の調査を始め、多大の收穫を擧げ、一行は翌一九三一年一月、本國に歸還したのであるが、その後、ワトキンスは南極地方探検を志して、遂に横を得ず、又々グリーンランド探検の決行となり、一九三二年八月九日レイク峽灣に到着したのである。が、間もなく、八月二〇日、土人船にて唯一人、附近調査中の彼は、遂に流氷のため犠牲とな

り、最後の探検は僅かにして中止するに至つたのである。當時の隊員の或る者は、その後もワトキンスの遺志を継ぎ、現在もグリーンランド地方研究を繼續して居るのである。

以上にて、全二十章に亙る本文を終るが、本書中には、尙ほ、極地探検に關する術語の解説及び、一九〇九—三四年に亙り北極地方各地に派遣せられたる探検隊を、ことごとく年代順に網羅し、隊長及探検船の名、探検地點等の解説、更に一八九〇—一九三三年の間に公刊されたる主要探検隊の報告書、著述等に關する解説は本書に収録せる廿數葉の貴重なる極地寫眞及び關係各地の地圖類と共に、一層本書の價値を大ならしむるものがある。(First Published 1934, p.p. 317. Thornton Butterworth, London) 犬塚久雄)

寄贈交換圖書雜誌目錄

- | | |
|--------------|-----------|
| 熾仁親王日記 附錄 | 高松 宮家 |
| 東豫史談 二三 | 西條史談會 |
| 金雞學院叢書 一〇〇 | 金雞學院 |
| 文化 三ノ三 | 東北帝大附屬圖書館 |
| 風俗研究 一九〇 | 風俗研究所 |
| 神社協會雜誌 三五ノ三 | 神社協會 |
| 人類學雜誌 五一ノ二 | 東京人類學會 |
| 經濟史研究 一五ノ三 | 日本經濟史研究所 |
| 考古學 七ノ一、二 | 東京考古學會 |
| 考古學雜誌 二六ノ二、三 | 考古學會 |

書 評

- | | |
|-------------|-------------|
| 國學院雜誌 四二ノ三 | 國大雜誌部 |
| 國民經濟雜誌 六〇ノ三 | 商業研究所 |
| 密教研究 五八 | 密教研究所 |
| 大谷學報 一七ノ一 | 大谷大學佛敎研究所 |
| 歷史地理 六七ノ三 | 日本歷史地理學會 |
| 歷史教育 一〇ノ一二 | 歷史敎育研究所 |
| 青丘學叢 二一 | 青丘學叢發行所 |
| 仙臺郷土研究 六ノ二 | 仙臺郷土研究所 |
| 史潮 六ノ一 | 大塚史學會 |
| 史苑 一〇 | 立敎大學史學會 |
| 史淵 一二 | 九大史學會 |
| 史學雜誌 四七ノ三 | 史學學 |
| 書誌學 六ノ三 | 日本書誌學會 |
| 東方學報 六 | 東方文化學院京都敎究所 |
| 刀劍會誌 四一七 | 中央刀劍會 |
| 東洋文化 一四〇 | 東洋文化學會 |

- | |
|-------------|
| 國大雜誌部 |
| 商業研究所 |
| 密教研究所 |
| 大谷大學佛敎研究所 |
| 日本歷史地理學會 |
| 歷史敎育研究所 |
| 青丘學叢發行所 |
| 仙臺郷土研究所 |
| 大塚史學會 |
| 立敎大學史學會 |
| 九大史學會 |
| 史學學 |
| 日本書誌學會 |
| 東方文化學院京都敎究所 |
| 中央刀劍會 |
| 東洋文化學會 |